

## イザヤ書

前回のビデオでは1章から39章のエルサレムに対する裁きと希望についてのメッセージを学びました  
イザヤは神に反逆したイスラエルの指導者たちを非難し  
アッシリアとバビロンという神の裁きを通して  
イスラエルの王国は滅びるだろうと言いました  
39章はエルサレムがバビロンに壊滅させられ捕囚にされるとイザヤが預言したところで終わります  
そして約百年後悲しいことにそれは現実となりました  
しかしイザヤが述べた大いなる希望は  
きよめられた新しいエルサレムでした  
それは来るべきメシアなる王を通して回復された神の国ですべての国の人々が平和のうちに暮らすのです  
40章以降はこの希望について語ります  
最初のセクションである40章から48章は  
イスラエルの希望と慰めについての記述で始まります  
バビロン捕囚は終わりイスラエルの罪は赦され  
新しい時代が到来すると告げられます  
イスラエルの民はみな神がご自身の王国を築くエルサレムに戻り  
他のすべての国の人々もそこで神の栄光を見ます  
しかしここで大きな疑問が生まれます  
これらの希望のことは誰の発言なのでしょう  
これらの預言は捕囚後の時代を 生きた人の視点から語られています  
つまりエズラやネヘミヤの時代ということです  
しかしイザヤはそれより150年前に 死んでいるのです  
では一体誰の発言なのでしょう  
これはイザヤが預言者として200年先の視点に立ち もう捕囚が終わったかのように  
して 未来の世代に語っているのだと  
考える人たちも大勢います  
しかしイザヤ書はそれとは別の  
可能性を示唆しているのです  
8章29章30章には  
イザヤがイスラエルの指導者たちから拒絶されたあと  
裁きと希望のメッセージを巻物に書き記して  
封印したことが書かれています  
彼はそれを  
来るべき日の証人とするために 弟子たちに渡しました  
イザヤは 神がこれの正しさを証明してくだ

さることを期待して死んだのです  
すでに学んだように 1 章から 39 章  
にはイザヤの預言がバビロン捕囚という形で実現したことが書いて  
あります彼は真の預言者でした そこで捕囚が終わった後  
イザヤの言葉を大切に保管して きた弟子たちが巻物を開封し  
そこにある希望の言葉を彼らの時代 に適用し始めたのです  
そう考えるとイザヤ書にはイザ ヤ本人の言葉と  
彼の弟子である預言者たちの言葉 もあります  
神はイザヤの希望のメッセージ を後の世代へ伝えるため  
この弟子たちを用いたものと考え られるのです  
どちらの説を取るにしろ これらの箇所は待ち望んでいた  
希望が到来したと伝えていることに 変わりはありません神はイザヤ  
が預言したことを実現したのです イザヤはイスラエルが神のしも  
べとなることで 神に応答することを願っていました  
つまりその歩みの中で神の義と 憐みを体験したイスラエルが  
神とはどんな方かをすべての国々 と分かち合ってほしいと  
願ったのですがそうはなりませんでした イスラエルはその役割を負わなかつた  
ばかりか 神は我々の苦境を気に留めず無視  
しておられる と不平を言ったのです  
バビロン捕囚が イスラエルに信仰を失わせたこ  
とは想像に難くありません 神にはそんな力はないのかもしれ  
れない バビロンの神々のほうが我々の神  
より優れているのかもしれない と彼らは思いました

そこで 41 章から 47 章はまるで裁判 のシーンのようになっています  
神はイスラエルの疑いや非難に対して 次のように答弁します  
バビロン捕囚が起こったのは神 が彼らを忘れていたからではない  
むしろイスラエルの罪に対して 神が計画した裁きである  
またバビロンを征服するために ペルシアを差し向けたのは神で  
ありおかげでイスラエルはイザ ヤの言葉どおりに故郷へ帰れた  
のである それゆえイスラエルは他国の偶像  
ではなく イスラエルの神こそ歴史の王なの  
だと知るべきである バビロンが滅びペルシアの王キュロス  
が君臨したのを見て イスラエルは神のみわざを認め  
そのしもべとなり この真の神について国々に告げ  
知らせるべきでした しかし 48 章にある裁判の結末を見る

と イスラエルは先祖と同じように  
反抗的で頑なだったのです そのため神はイスラエルをしも  
べと認めることはできませんでした それでもなお神はイスラエルを  
祝福しようとされたのです

この問題を解決するために神は  
新たな手段を取られると イザヤは言いましたその内容が  
49 章から 55 章です ここには神のしもべと呼ばれ  
イスラエルにはできなかった神の 任務をなし遂げる人が登場します  
神は彼にイスラエルという称号 を与え ます  
イスラエルの民を神のもとに連れ 帰るという任務を与え  
次に国々に対する神の光となる 任務を与えました  
彼は神の霊によって力が与えられ すべての国々に良い知らせと神  
の王国をもたらすと記されています これはまるで 9 章と 11 章にあるメシア  
なる王のようです しかし彼がどのようにして神の王国  
をもたらすか その方法には驚かされます彼は  
拒絶され殴られ 最終的には自分の民に殺される  
というのです 彼は人々の非難を受けて死刑宣告  
をされ 彼の民の罪のために死ぬこととなります  
この神のしもべの死は 人々の罪と反逆を贖うための犠牲  
の死だとイザヤは言います

そして彼は突然よみがえり  
この死によって人々が義とされる 道を開きます  
こうして人と神の関係が回復される のです  
このセクションは 神のしもべに対する人々の 2 つの  
反応を記して終わります

ある人々はへりくだって罪を離れ  
神のしもべがしてくれたことを 受け入れます  
彼らはしもべたちまたは種と呼ばれる ようになります  
6 章に出てきた聖なる種のことです この人たちはメシアの王国の祝福を  
味わうこととなります  
しかし悪しき者と呼ばれる者たち もいて  
彼らは神のしもべもそのしもべ たちも拒絶します  
そして次がこの書の最後のセクション 56 章から 66 章であり

ここでもべたちが神の国を受け 継ぎます

この箇所はイザヤ書全体のテーマ をまとめ  
シンメトリーがあり巧みに構成 されています  
中心には神の霊がしもべに力を 与え  
神の王国の良い知らせを弱者に 宣べ伝えさせたことについての  
3つの美しい詩があります神のし もべは  
イザヤ書ではじめから語られている 希望の約束を改めて保証します  
神のしもべたちが住む新しいエルサレム は  
神の義と憐みと祝福が世界に広 がっていく源となるのです  
これらの詩を挟むように2つの長い 悔い改めの祈りがあります  
しもべたちがイスラエルの罪を 告白し  
自分たちが見聞きする悪しき行 いを嘆く祈りです  
彼らは神に赦しを求め神の国が 天にあるように  
この地上にも来るようにと願います これらの祈りを挟むように配置  
されている詩は 神のしもべたちと  
彼らを迫害する悪しき者たちがた どの道の明暗を描くものです  
神は神が作った素晴らしい世界を 悪と自己中心と偶像礼拝によって  
汚す人々を裁き 彼らを神の都から永久に追放する  
のです しかし神の前にへりくだり  
自分の罪を悔い改めるしもべたち は赦され  
新しいエルサレムを受け継ぎます その都は死も苦しみも永遠に味  
わうことのない 新しくされた世界を指している  
のです さてこのセクションの一番最初  
と最後を見てみましょう この新しくされた世界である神  
の国では すべての国の人々が創造主贖い  
主を知って 神の契約の家族であるしもべたち  
に加わるように招かれています  
このようにイザヤ書は神の契約  
による約束が すべて実現するという壮大なビジョン  
を持って終わるのです 苦しみを受けるしもべなる王を  
通して 神はすべての国の人々からなる  
契約の家族を作ります 彼らは天に神の国と神の義がある  
ように 地上にも新しい創造の日が来る  
ことを待ち望んでいるのです この力強い希望これがイザヤ書  
です

## 500字要約

イザヤ書は、エルサレムに対する裁きと希望についてのメッセージを伝えます。イザヤは神に反逆した指導者を非難し、バビロンによるイスラエルの滅亡を預言しました。しかし、彼の大きな希望は新しいエルサレムで、神の国を通じて平和な暮らしを約束します。後半の章では、この希望に焦点を当て、エズラやネヘミヤの時代の人々の視点から語られています。イザヤ自身が亡くなってからの視点で未来の出来事を予言したとする見解もあります。イザヤ書には彼の言葉と弟子たちの言葉が混在しており、神は彼の希望を後の世代に伝えるために彼らを用いたとされています。

バビロン捕囚後、イザヤの弟子たちは彼の言葉を大切に保管し、その希望を自分たちの時代に適用し始めました。イザヤはイスラエルが神に応答し、神の義と憐みを全世界に分かち合うことを望んでいましたが、それは実現しませんでした。彼の予言はバビロン捕囚後に実現し、彼の弟子たちがその言葉を継承しました。イザヤ書は、神のしもべが人々の罪を贖い、人と神の関係を回復することを描いています。